

古語と民俗

文学部助教授 野本寛一

民俗を学ぶ旅は発見と感動の連続である。山あいのムラ・海辺のムラで地道に生きてきた人びとから実に様々なことを教えられる。その一つに「ことば」の問題がある。『万葉集』でしか見かけたことのない古語をムラの古老の口から耳にすることもあり、いかなる国語辞典にも収められていないことばを聞くこともある。逆に、古典を読んでいて、その中に、山の老人の語ったことばを発見して、その原義が初めて明らかになるといったこともある。

1・アラキ

・新墾田あらきだの鹿猪田ししだの稲を倉に上げてあなひねひねしわが恋ふらくは（『万葉集』3848）
・斎種あらき蒔く新墾の小田を求めむと足結出濡れぬこの川の瀬に（『万葉集』1110）

など『万葉集』の中にアラキという語が見える。アラキとは、「新しく開墾した所」アラキダは「新しく開墾した田」の意である。神奈川県足柄上郡山北町玄倉・静岡県磐田郡水窪町針間野・長野県下伊那郡上村下栗・愛知県北設楽郡富山村大谷などでは、4年間続ける焼畑輪作の1年目、即ち、拓いた年の焼畑地のことを「アラキ」と呼ぶ。富山村大谷では、2年目を「カーシ」、3年目を「クナ」と称している。そして、山梨県南巨摩郡身延町大袋・岩手県稗貫郡大迫町白岩・静岡市奥仙保などでは焼畑輪作1年目を「アラク」と言い、新潟県東蒲原郡上川村漆沢・静岡県賀茂郡西伊豆町大城などではこれを「アラコ」と呼んだ。静岡県榛原郡相良町では、山を伐り開いて作った開墾畑のことを「アラコ」と呼ぶ。こうしてみると、アラキ・アラク・ア

ラコが同系の語であることがわかるのであるが、その語源は明確ではない。『日本国語大辞典』（小学館）・『時代別国語大辞典上代編』（三省堂）などにもその語源は説明されていない。

石川県輪島市白米町は「能登の千枚田」で稲作をするムラである。平成4年2月、当地の日裏幸作さん（大正14年生まれ）から稲作の話聞いていたときのことである。日裏さんは、山田に対して、海に面した千枚田のことを「アラケダ」と呼んだ。アラキ・アラク・アラコに次いでアラケと言うことばを耳にしたのである。このアラケと言うことばを聞いた瞬間、『万葉集』にあったアラキの語源が氷解した。アラケは、「アラアケ」即ち「新開け」であり、新開を意味する語である。アラキもアラクもアラコもアラアケ・アラケの音韻変化と考えることができよう。アラコは、「新処あらこ」と考えることもできるが、新たなる開墾地を示す語としては、アラアケ系の方が実感が強い。日裏さんの話によれば、白米町の人びとは、まず山田を開き、次に千枚田を開いたことになる。

2・コツ

・鳴瀬ろに木屑こつの寄すなすいとのかてかなしき背ろに人さへ寄すも（『万葉集』3548）

「木屑こつ」は「コツミ」とも言い、木のくずのことであるが、この語が日常生活の中で使われることはまずない。しかし、この「コツ」が焼畑地帯で生きていたのである。焼畑は、山の木を伐って乾燥させておき、やがて火入れをするのであるが、その木を一度の火入れで焼き尽くすことはできない。焼け残り

の木の屑を集めて再度焼く作業がある。岐阜県本巣郡根尾村越波では、この作業のことを「コツヤキ」と称した。また、高知県吾川郡吾川村・同池川町などではこの作業を「コツヤキ」と呼んだ。「クヅ」即ち「屑」の語源が「コツ」「コヅ」であったことも考えられよう。

3・クタシ

・富人の家の子どもくたの着る身無み腐し捨つらむ絶綿きぬわたらはも（『万葉集』900）

・卯の花うたなを腐す霖雨なぐさめの水始こづみに寄らむ子もがも（『万葉集』4217）

ここに見られる「腐す」は「腐らせる」という意である。さみだれの異称として「卯の花腐し」ということばが用いられるが、このことばの概念が既に万葉時代に成立していたことは上記の歌によってわかる。卯の花腐し以外に、「腐す」という語が日常生活で用いられることはほとんどないのであるが、この語も焼畑地帯では生き続けていた。焼畑農民の最大の敵は猪だった。猪は、稗・粟・大豆・小豆・芋類など、農民達が丹精した作物の稔りを一夜にして喰い荒らしてしまう。そのため、焼畑農民は、じつに様々な猪除けをくふうして対応したのであった。その一つに臭気による防除法があり、中に「クタシ」と呼ばれる方法があった。①猪の内臓や残肉を壺や桶に入れて腐らせておき、縦15センチ・幅4センチほどの板の先にボロ布をはさんで、それに腐液をしみこませ、30センチほどの竹の先に吊って焼畑の周囲に2メートル間隔に立てた。これをクタシと呼んだ（静岡市田代）。②牡の猪の内臓や残肉を桶に入れ、灰を加えて腐らせておき、これを焼畑に振り撒いた。牝の猪のものだと猪が集まってくると言って牡の猪のものを使った。これをクタシと称した（静岡市大間）。③背負い樽に猪のハラワタと人間の小便を入れ、冬から秋まで腐らせておき、これをクタシと称した。クタシができると、ひとつかみの麦カラの根と先を切って二つ折りにし、2か所ほど縛る。

折った所に棒を挿し、箒状のものを作った。それを焼畑の周囲に点々と立て、麦カラの穴にクタシが詰まるように入れた（長野県下伊那郡上村下栗）。④猪のハラワタを桶に入れて腐らせておき、焼畑の周囲の木の切り株や石に塗ってまわった。これをクタシと呼んだ（愛知県北設楽郡富山村大谷）。クタシという語は、南アルプス山麓の焼畑地帯に生きていたのであった。

4・スカ

・美夜自呂すかへの砂丘すかへに立てる顔が花な咲き出でそねこめて偲はむ（『万葉集』3575）

「スカ」は、万葉仮名で「須可」と表記されており、この場合、砂丘の意である。「スカ」は宮城県亘理郡・岡山県磐津郡などでは砂州を意味し、静岡県磐田郡・同小笠郡海岸部などでは砂丘を意味する普通名詞として現在も生きて使われている。遠州海岸部では、このスカが、湖西市白須賀・大須賀町横須賀といった固有名詞となり、可美村高塚・大須賀町藤塚・浜岡町宮内小字藤塚などツカに転訛した形でも生きている。

和歌山県新宮市熊野川右岸の河口近くに「熊野阿須賀神社」が鎮座している。蓬萊山と通称される円錐形の小山を神体山とする古社で、境内からは、弥生時代の竪穴・土師器・須恵器・祭祀用手こね土器・滑石製白玉などが出土し、鎌倉時代の懸仏も出土している。『熊野年代記』を読み進めると、熊野川の氾濫や、熊野川河口の河口閉塞の記事が多いのに驚かされる。例えば次の通りである。①承和十一（844）甲子、新宮の川口一夜の内に砂山と成り、入津止ること三日、川満つること二丈。②弘安十（1287）丁亥、飛鳥長床海中の大鮫を切る。此の時八月、十月に至るまで入津止る。——①は、熊野川の河口が砂で閉ざされ、一夜のうちに砂山ができ、舟が川に入れなくなり、水位が二丈あがったというもので、「河口閉塞」を意味している。②は、熊野川の悪霊を大鮫とし、飛鳥（熊野阿須賀神社）の修験者が、その大鮫を退治した

ということである。阿須賀神社の「阿」は接頭語で「須賀」は先に述べてきた「スカ」即ち「州処」の意で、河口に堆積された砂州・砂嘴を意味している。熊野阿須賀神社は、熊野川の河口閉塞を元にもどし、河口の健全な機能を守る神だったのである。『万葉集』に登場する「スカ」という普通名詞は、現在も各地で普通名詞として使われ、それがまた、時

に、地名・神社名のように固有名詞化して生きているのであった。

民俗をたどり、確かめることによって古語の意味が明らかになり、実感を増すことがある。一方、民俗・民俗語彙に古語を照応させることによって民俗の古さや源流を確かめることもできる。今後も民俗と古語の相互照射を続けてゆきたい。

Memories of Southampton

理工学部経営工学科

講師 前田節雄

私は、近畿大学から平成3年4月1日から平成4年3月31日の1年間、好運にも英国サウサンプトン大学へ留学の機会が与えられました。好運の一つは、留学が出来たこと、もう一つはサウサンプトン大学へ留学できたことでもあります。と言いますのは、留学の話が出て、経営工学科の第一候補に私が決まったのが確か平成2年の5月中頃だったと記憶しています。それまで留学は第三者のことでまさか自分自身に回って来ることはないと思って、留学先等については何も考えておらず、9月末頃までに行き先を決定して提出しなければならなくなり焦りました。ただ、「振動の人体への影響の研究」をするのならサウサンプトン大学音響振動研究所人間工学研究部のグリフィン教授の元で研究が出来ればいなど以前から思っておりましたので、急遽、グ

リフィン教授へ、近畿大学から1年間留学の機会が与えられた事と、グリフィン教授の提案されている式と私の提案している式との相違点について研究したいとの内容の手紙を出したのが6月初旬だったと思います。グリフィン教授から返事をいただいたのが6月末頃。この返事がいただけるまでの数週間の長く感じたことは今でも忘れられません。「共同研究をやりましょう」との内容の手紙の嬉しかったことは言葉に出来ません。顔も知らない、ただ、論文でよく名前の見た、そして、振動の研究では世界で最も知名度のある教授から共同研究を承諾されたのですから。それから、数回の手紙やFAXのやり取りがあり、平成3年4月1日に、胸いっぱい不安を持って家族3人で大阪空港をあとにしました。